合志楓の森中学校だより

楓の森

R5.12.8（第8号）
文責：渕上 佳宏

パブリシティの活用

十二月（師走）になりました。一時は真冬の寒さを感じる日もありましたが、週末には季節外れの温かさとなるそうで、私（校長）は「五十年前と気候が違う！」と感じています。

ところで、前期後半から後期前半にかけて、本校の様々な取組を新聞記事やテレビニュースで取り上げていただく機会がたくさんありました。それもこれも、本校教職員の熱心な指導と、それに応え、様々な活動に精一杯取り組んできた生徒たちのおかげです。本校は現在、パブリシティをうまく活用できていると言ってもよいかもしれません。

「パブリシティ」とは、直訳では「宣伝」という意味ですが、一般には「広く知ってもらうこと」という意味で使われることが多いようです。ご承知のとおり、本校は菊池医療刑務支所の跡地に建てられ、菊池恵楓園に隣接していることから、ハンセン病問題に係る人権教育の推進校としての使命があります。本校の取組をメディアに取り上げていただくことは、まさしく社会への啓発として、ハンセン病問題を知ってもらうことだと思っています。

しかしながら、マスコミからの取材を節操なく受けているわけではありません。実は先日、ある放送局の記者さんが、先に出た他社の新聞記事を見て、「他に何かネタはありませんか？」と、本校に取材依頼がありました。同放送局からのこのような姿勢での依頼は、これが三回目だったので、私は「電話ではなく、学校で話をしましょう。」と申し出ました。今回の記者さんは、その申し出通り来校されたので、それまでの記者さんよりはずっと誠実だったと思っています。ただちょっと、これまでの経緯も含め、お小言を言わせてもらいました。その概要は次の通りです。

たしかに本校は、ハンセン病問題の学習に取り組んでおり、その内容には人権、差別、裁判、国家賠償、…と、マスコミの大好物な素材があります。しかし、取材に来たらお好みの料理が出るとは思わないでください。今回三年生は、ハンセン病問題に係る家族訴訟を「構成劇」と言う形で発表します。その劇の中には、差別を体現する場面がたくさんあります。その場面の一部を切り取り、映像で流すようなことがあれば、差別の拡散につながる恐れもあります。生徒たちの頑張りの足を引っ張るような放送だけはしないでください。

その上で、二年生も三年生同様、学習を積み重ね、その成果を来年度の学習発表会で披露すると思いますので、それを追跡取材されてみてはいかがですか。と提案しました。しかし、その後は音沙汰無しです。

それにしても、三年生の構成劇。涙が出ました。鳥肌が立ちました。その感動はなかなか言葉で言い表せません。保護者の皆様だけでなく、もっと多くの方々に観てほしかったとも思います。昨年度、一昨年度はコロナ禍であったため、予算がついたユーチューブ配信。今年度はそれができず、今となっては少し残念です。

3年生の気迫のこもった演技

込められたメッセージを感じ取る力

二年生が二泊三日の沖縄への修学旅行から帰ってきました。その様子を本校HPに随時掲載したところ、三日間で二千回程のアクセスをいただきました。そちらをご覧になられた保護者の皆様は、生徒たちが、旅行を楽しみつつも、仲間との友情を深め、数多くの学びを修めて帰ってきたことを、ご理解いただけたのではないでしょうか。

その中でも、帰校後に団長の髙橋 教頭から第一声で報告があったことを紹介します。それは、佐喜眞美術館において「沖縄戦の図」の鑑賞をした際のことです。館長の講話の最後に質問タイムがあったそうですが、生徒たちから時間をオーバーするほどたくさんの質問があり、それもこの作品に込められたメッセージに迫る鋭いものばかりだったとのことです。そのことは、講話後に館長から「今日は感動しました。子供たちがよく育っていますね。素晴らしい生徒さんです。」というお褒めの言葉をいただいたことからも納得です。併せて教頭から「これは金陽会作品展の影響もありますよ。」とのこと。なるほど二年生も、小学六年生の時から三回も金陽会の作品展を鑑賞しています。菊池恵楓園自治会絵画クラブ「金陽会」の作品の中には、メッセージ性の強い作品も数多くあり、そういう作品に触れてきた生徒たちの感性が、佐喜眞美術館での様子に表れていたのかもしれませんね。キュレーターの 蔵座 さんにも、改めて感謝したい気持ちになったところです。

学校HPのQRコード